

近現代における鉋の変遷について

Historical Changes of the Plane in the Modern Era

船曳 悦子

Etsuko FUNABIKI

Abstract

In this article, the following points were shown about the historical change from the single iron plane to the double iron plane based on literature, archival photographs and actual samples.

- (1)The cap iron of a double iron plane with a hole in a fixed position is a re-utilized tobacco mincing blade.
- (2)In the early Meiji period when the western plane was imported, the construction and working of the double iron plane based on the western plane had been elucidated.
- (3)The double iron plane already existed in the middle Meiji period as a plane for handicraft.
- (4)The double iron plane is not seen being used by artisans (carpenters) using planes in the Meiji period, but it was used in the early Showa period.

Keywords : 近代, 大工道具, 職人, 大工, 鉋

1. はじめに

1-1. 研究背景と目的

江戸中期から昭和初期にかけて、手道具を駆使して木造建築をつくる技術は、加工精度という点においても最高水準に達したといわれている。そこには、建築用主要道具の発達があったと考えられる。たとえば、削り面における逆目を防ぐために鉋刃を二枚入れた合鉋、ネジの利用により微調整を容易にした機械鉋、縦挽き・横挽き両用の鋸である両刃鋸、鑿の刃裏を平らに研ぎやすく工夫した裏透などである。大工道具の歴史的研究については、一定の成果があるが¹⁻⁴⁾、近現代の道具まで網羅されているとはいえない。

個々の大工道具に着目した研究のうち、鉋を対象にした研究には、鉋台製造に関する状況から、二枚刃鉋は明治時代に西洋鉋の影響を受けて、逆目を起こさずに削れる裏金を装備し、次第に普及したと述べている星野欣也らの研究⁵⁾、明治27年前後は、二枚刃鉋の切削角を大きくすることにより逆目を防ぐという西洋木工工作理論を日本の平鉋に適用する方法を模索していた時代とらえている沖本弘の研究⁶⁾がある。しかしながら、これらの研究は一枚鉋から二枚鉋への発展過程について着目して詳述したものではない。筆者は、近現代の大工道具の変遷に焦点をあてて研究をしてきた⁷⁻⁹⁾。

そこで本稿では、近代における鉋の変遷の経緯として、一枚鉋(図1)から二枚鉋(図2)への変化とその後について、文献資料と古写真、及び実物資料をもとに考察することを目的

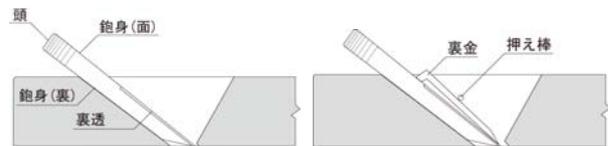


図1 一枚鉋



図2 二枚鉋(合せ鉋)

※図1と名称が同一のものは省略した。

として、次の手順で進める。(1)二枚鉋の出現時期における定説として、現在、二枚鉋が出現したと考えられている年代を示す[1章2節]。(2)歴史的文献資料[2章1節]、古写真[2章2節]、大工道具商報[2章3節]、手工教科書[2章4節]をもとに一枚鉋から二枚鉋が考えられた時期を推定する。(3)実物の鉋を対象に変遷をみる[3章]。(4)これらをもとに考察を述べる[4章]。

1-2. 二枚鉋の出現時期における定説

大工道具の文献のうち、二枚鉋の出現時期の記述があるものについて、文献発行年順に取り上げる。

村松貞次郎『大工道具の歴史』には、以下の記述がある。「二枚刃ガンナは素人用 一般の家庭にあるカンナは、裏金の付いた合わせガンナ(あるいは二枚刃ガンナ)である。この裏金は逆目のできるのを防ぐために考案されたもので、日露戦争(明治三十七、八年)のころ、熟練大工の不足で素人のような大工がたくさんあらわれた。そこで逆目の立つのを何とか防ごうということで考案されたものだといわれる。しかし

近現代における鉋の変遷について

合わせガンナで削った面は、どうしても艶がない。やはり昔から一枚ガンナで、という大工さんが多い。あれは素人の道具、という職人のプライドもあるのだろう。」¹⁰⁾この文献では、明治37年頃の戦争に伴う熟練大工の不足で素人用鉋として二枚鉋が出現したとしている。

秋岡芳夫・吉見誠『木工具・使用法』には、以下の記述がある。「わが国で二枚鉋が一般的に使用されるようになったのは明治30年代からで、洋風鉋から影響を受けて考案されたものであろう。洋風鉋にくらべて構造は少し違うが、逆目防止の原理はまったく同一で、広く一般にしようされる便利な鉋である。(中略) そもそも裏金には、鉋刃が材料面に深く食い込むのを防ぎ、裏金の表刃を利用して削屑を急激に屈折させて逆目を起こさないように削る。(中略) 裏金は直接削作用を行なうのではないから、やや弾力に富んだ柔らかい薄手の鋼のものがよい。従来裏金には、煙草包丁を必要な寸法に切断して使用してきた。煙草包丁は俗に葉焼といわれ、鋼が紙のように薄い。」¹¹⁾この文献では、二枚鉋が一般的に使用されるようになったのは、明治30年代で西洋鉋の影響によるものと述べている。

土田一郎『日本の伝統工具』には、以下の記述がある。「洋鋼の使用、明治二十年後半のウラ金(いわゆる二枚鉋に逆目止めとして使用される、添刃)の登場と鉋も少しずつ新しいものを取り入れて進歩してきました。」¹²⁾この文献では、二枚鉋の出現は、明治20年代後半としている。

秋岡芳夫『日本の手道具』には、以下の記述がある。「煙草包丁と言えば二枚鉋(合わせ鉋)を思い出す。われわれが子供の頃の鉋の裏刃には十九粒ほどの丸い穴が開いていた。一体何のためか一向に分らず、長じて後、聞いたところでは、昔、日清戦争の頃、輸入品の西欧の鉄製二枚刃を始めてためし、逆目が完全に押えられるのに驚き、早速わが国の鉋にもと思ったが手近にあったのが当時どこの煙草のみのいる家庭にもあったキザミ煙草用の煙草包丁、それを鉋にとりつけたのが日本式合わせ鉋の始まりであり、煙草包丁の耳の紐通しの丸い穴がそのまま、鉋の裏刃の形式として昭和の御代まで続いたものだと言う。」¹³⁾この文献では、日清戦争の頃に輸入品であった西洋鉋の二枚刃が逆目を完全に押えられることを知ったことによるものとしている。また、煙草包丁の裏金と二枚鉋の関係性を述べている。

以上、4点の文献より、二枚鉋は明治30年代には西洋鉋をもとに逆目を防ぐことができる鉋として認識されていたことが伺える。

2. 資料にみる鉋の変遷

2-1. 歴史的文献資料にみる鉋

オランダのライデン国立民族学博物館には、1817-23年取

集のブロムホフコレクション36点、1820-29年収集のフィッセルコレクション46点、1823-30年収集のシーボルトコレクション75点の大工道具や大工道具図が所蔵されている¹⁴⁾。その中にある鉋は、いずれも一枚鉋である。

同じ頃、江戸時代の百科事典でもある寺島良安『和漢三才図会』¹⁵⁾、金沢兼光『和漢船用集』¹⁶⁾にも二枚鉋は見られない。

『モースの日記』¹⁷⁾では、エドワード・S・モースは、お雇い外国人として、日本に明治10(1877)年6月から11月、明治11(1878)年4月から9月、明治15(1882)年6月から明治16(1883)年2月の3回訪日し、18ヶ月間滞在している。明治10(1877)年9月8日、東京を訪れたモースは、図3の大工道具のスケッチを残している。それには、鉋身と合せてもう一枚別の刃が書かれている。右の図は鉋身が垂直に仕込まれていることから台直鉋^{註1)}あるいは堅木を削るための鉋であると考えられるが、現在においても台直鉋は一枚鉋であることから、当時、二枚鉋であったとは考えにくい。そのため鉋刃を固定するための木製の楔の可能性もある。

以上、歴史的文献では、江戸時代に二枚鉋は見られない。



図3 モースの日記 明治10(1877)年9月8日(東京)



図4 家具職人の作業風景1, 明治8(1875)年頃, 長崎大学附属図書館所蔵



図5 大工の作業風景1, 長崎大学附属図書館所蔵

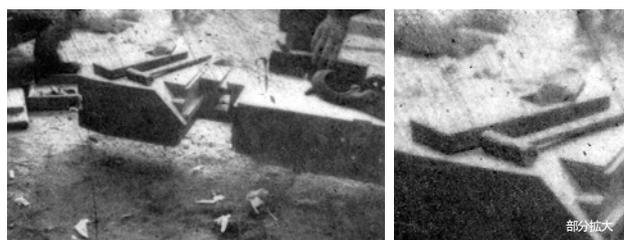


図6 大工の作業風景1, 昭和10(1933)年, タウトが撮ったニッポン, 2007

近現代における鉋の変遷について

表1 大工道具商報

表題	発行	所在地	発行年	掲載内容
直段報告	湯浅商店	東京市日本橋區通油町	明治35(1902)年9月	合鉋裏刃：一八 二十五銭、一六 二十五銭、一四 二十五銭／正鋼打煙草庖刀
黒田金物商報 第参拾號	黒田清右衛門商店	兵庫県三木町	大正-昭和初期(推定)	素人用臺付鉋(図7)／小鉋二枚台附／押鉋
金物商報	木下兄弟金物店	兵庫県三木町	昭和4(1929)年1月	台打之部：一枚臺打 参圓、二枚臺打 参圓参拾銭
—	富岡寅之助商店	兵庫県三木町 (掲載道具銘より)	昭和9(1934)年以降 (実用新案出願公告 番号より)	手工鉋／押へ金：磨並、蔦印、穴明キ、本鋼旭綿、鋼入文字、各寸四用、寸六用、寸八用、二寸用
黒田商報	黒田清右衛門商店	兵庫県三木町	昭和10(1935)年以降 (掲載内容より)	大工用鉋／押鉋(合鉋)：庖丁押
越後代表的大工道具商報	竹内亨一郎商店	新潟県三條市	昭和14(1939)年	鉋之部／裏金之部：最上鋼付本煙草庖丁、寸四鉋用、寸六鉋用、寸八鉋用、二寸鉋用、並裏金
CATALOGUE	三條金物株式会社	新潟県三條市	昭和14(1939)年7月	台付二枚仕込／裏鉋：並、本焼、煙草庖丁、鋼付天祐、勝弘印、各寸四用、寸六用、寸八用、二寸用(図13)

2-2. 古写真にみる鉋

次に、大工道具を使用する職人を撮影した写真に着目する。図4は、建具職人の作業風景である。髪を結った職人は、作業台の上で、木槌と鑿で刻みものをしている。作業台の手前には、平鉋が置かれている。これは明らかに一枚鉋である。職人の後ろにも鉋が道具箱に立掛けてあるが、これも一枚鉋である。明治8年ごろ撮影とするこの写真には、二枚鉋は見られない。

図5は、髪を結び頭にねじり鉢巻き、半纏を身に纏った大工が鉋がけをしている。その鉋は、一枚鉋に見える。所蔵先の情報では明治期のものとされている。

図6は、『タウトが撮ったニッポン』に精緻な職人の仕事を撮影した写真である¹⁸⁾。よく見ると、綿帽子^{注2)}の形をした鉋身に薄らと頭が丸い裏刃が仕込まれていることが確認できることから、二枚鉋である。

以上のことから、図4と図5の職人は同様の風貌であることから同時代のものと推測する。明治初期の建具職人、大工ともに二枚鉋は使用していないが、図6の昭和初期の大工は二枚鉋を使用していることが明らかになった。

2-3. 大工道具商報にみる鉋

ここで述べる「大工道具商報」とは、大工道具を取り扱う問屋及び小売店が発行した商品を販売する上で使用されたカタログとする。使用期間が短いうえ、商店独自で発行されるものであることから資料として散逸しており現存するものは数少ない。今回、見つけることができた数冊の商報から二枚鉋の掲載状況を表1に示す。

明治35(1902)年9月に発行された湯浅商店打物部『南海月報』には、「合鉋裏金 一八 二十五銭、一六 二十五銭、一四 二十五銭」とあることから、二枚鉋の裏金が販売されていた。それゆえ二枚鉋は存在したといえる。

掲載内容より大正から昭和初期に発行されたと推測できる黒田清右衛門商店『黒田金物商報 第参拾號』には、図7に



図7 黒田清右衛門商店『黒田金物商報第参拾號』大正～昭和初期

示す「素人用臺付鉋」と「小鉋二枚台附」のみが二枚鉋として掲載されている。

昭和4(1929)年発行の木下兄弟金物店『金物商報』では、一枚鉋、二枚鉋それぞれの台打ちの値段が掲載されている。

昭和9(1934)年発行の富岡寅之助商店の商報では、手工鉋と専門職用と推定される鉋が別々の二枚鉋として掲載されている。

昭和10(1935)年の発行と推定される黒田清右衛門商店『黒田商報』には「大工用鉋」として二枚鉋が掲載されている。

昭和14(1939)年発行の竹内亨一郎商店『越後代表的大工道具商報』と三條金物株式会社『CATALOGUE』においても「職人用」として二枚鉋が掲載されている。

以上のことから、明治35年には二枚鉋は一般に市販されていたが、昭和初期までは、素人用や手工用であり、大工は一枚鉋を使用していたことが伺える。

2-4. 手工教科書にみる鉋

明治政府の新教育制度推進により実業教育が重要視されるようになった。それに伴い、表2に示す手工関連の教科書に類する書籍が多数発行され、二枚鉋が掲載されているものはいくつかある。

近現代における鉋の変遷について

梅村久麿作『應用手工用具』には、西洋鉋の仕組みとして図8が示されているが、これと同様の図は、水上彦太郎「日本木工道具之説」『工學會誌』において明治18(1885)年に発表されている。この時点で、平鉋として二枚鉋が紹介されているものは、一戸清方『中等教育手工工具論』である。「鉋ノ切味ヲ善クセントスレハ木ニ逆目ノ起ル害多ク切味逆目相伴随シテ遂ニ分離シ難シ然ルニ二枚刃ノ装置ハ此切味ヲ害スルコトナクシテ逆目ノ起ルヲ防ク利アリ西洋鉋ハ夙ニ之ヲ應用セリ其理想ニ豊富ナル嘆稱スヘキナリ」¹⁹⁾とあり、二枚鉋の仕組みが述べられている。また、「細キ鐵棒ヲ横貫シ其間ニ鋸身二枚ヲ密ニ嵌ルセシムル」²⁰⁾とあり、図9に示す平鉋の二枚刃を密着させる必要性を西洋鉋と比較して述べている。

伊藤為吉『木工術教科書 第一』には、二枚鉋とともに両刃鉋と返刃鉋についての記述がある。両刃鉋は、実物として存在するが、返刃鉋については、現時点では確認できていない。図10に示す二枚鉋は、「両刃鉋同様の理を備ふるものなりと雖も柔軟なる材面に用ひて成効ある點に於ては遙かに両刃鉋に優れるものなるを以て現今専ら板削用として行はるゝ鉋なり」²¹⁾とある。この鉋の形は、鉋身よりひとまわり小さい裏金を密着した状態で鉋台に仕込まれていることから、二枚の刃先を揃えると両刃鉋と同じ状態になるが、通常二枚鉋の仕込みは、鉋身より裏金は若干控えて仕込むことが、図10に示されている。

大正時代に入り、佐藤巳之吉『木工具の使い方及木工機械製作』では、「昔時は今日の如く二枚鉋なる物は用ひられざりしを以て初學者は鉋削りに不便を感じられたと云う。」²²⁾とあることから、二枚鉋は教育用鉋としても初心者が使用する鉋であったことがわかる。図11をみると、「鉋徳(鉋身)」は先に挙げた図10の鉋と同じ形であるが、「裏鉋(裏金)」は、四角い形になっている。

以上のことから、二枚鉋は明治中期から手工教科書に登場し、そこでは、西洋鉋の二枚刃と比較するかたちで、鉋の切味と逆目との関係、鉋身の仕込み角度、鉋身の刃先の形状等さまざまな考察がなされていた。また、裏金の形状は、現在の形状に近い四角い形状の裏金に変化している。

3. 実物資料に見る鉋の変遷

3-1. 二枚鉋の変遷

二枚鉋の実物資料に着目する。鉋を含め大工道具に共通することであるが、仕事のために使用される道具である。そのため、切味が悪くなれば砥石で研がれるだろうし、あまりにも調子が悪ければ、別の道具を使用する。使いやすい鉋であっても鉋刃が短くなれば、転用して使用したとしてもいずれ寿命がくる。道具の形状も使い手が使用しやすいように手を入れるのが通常である。そのため、一概に道具の形から制作年代を推定することは難しい。鉋についても同様で、頭の形状が綿帽子型、材料が玉鋼製の鉋は、古いものといわれている。しかしながら、鉋身が古い形状をしている二枚鉋であっても、後の時代に一枚鉋から二枚鉋に据え替えられた可能性も考えられる。「鉋身一枚に鉋台十台」といわれることから明らかのように、鉋台は消耗品である。そのような現状を踏まえたうえで、ここでは初めから二枚鉋として作られたであろう鉋を対象に裏金の変遷を実物図12で確認する。

図12-aは、裏金の頭が丸く、二枚の鉋刃が密着している点で、明治期の形状で前述した図10とよく似ていることから、明治期の形状であると推定する。図12-bは、裏金が四角い形状であり、図11の裏金と形状に近いことから、大正期には四角い形状の裏金があったものと推定する。裏金の面には細長い鉄棒が二つのリベットで固定されている。これはその後、四角い形状で両耳(刃先とは反対の角の部分)を折り曲げる、

表2 手工関連の教科書に掲載された二枚鉋

表題	著者/編	発行年	掲載
普通教育 手工科工具使用法 全	細川謙太郎	明治22(1889)年6月	×
應用手工用具論	梅村久麿作	明治22(1889)年8月	図8
中等教育手工工具論	一戸清方	明治27(1894)年4月	図9
木工術教科書 第一	伊藤為吉	明治27(1894)年8月	図10
普通木工教科書	岡山秀吉	明治30(1897)年7月	×
普通木工術	文部省	明治32(1899)年5月	○
手工科教授細案	棚橋源太郎, 岡山秀吉	明治39(1906)年7月	×
日本手工原論	一戸清方	明治40(1907)年4月	○
普通手工提案	阿部七五三	明治40(1907)年9月	×
師範教育 手工教科書	岡山秀吉	明治40(1907)年10月	×
手工教材及教授法	岡山秀吉	明治42(1909)年6月	×
最新手工教授書	佐野正造	明治43(1910)年6月	○
手工実習法	藤岡亀三郎	大正2(1913)年2月	○
児童の手工	藤岡亀三郎	大正11(1922)年2月	○
木工具の使い方及木工機械製作	佐藤巳之吉	大正14(1925)年10月	図11
手工科教材及教授法	岡山秀吉	大正15(1926)年12月	×

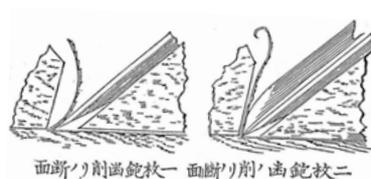


図8 梅村久麿作『應用手工用具論』明治22(1889)年



図9 一戸清方『中等教育手工工具論』明治27(1894)年

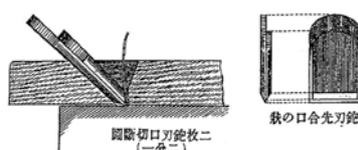


図10 伊藤為吉『木工術教科書 第一』明治27(1894)年

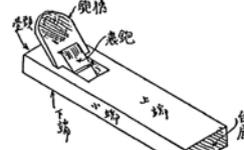


図11 佐藤巳之吉『木工具の使い方及木工機械製作』大正14(1925)年

近現代における鉋の変遷について

現在の裏金に見られる形状になっていく。図12-cは、通称「エクボ」といわれる裏金である^{注3)}。関西地方で見られ、裏金の面に2つの凸部を作ったものである。図12-dは、煙草庖丁を再利用したといわれている裏金である。

機能的にみると、図12-bは、裏金の先とリベット接合した部分との2点で鉋身と接しており、図12-cは、裏金の先と裏金の面に2つの凸部との3点で鉋身と接している。また、図12-dは、裏金の刃先と両耳が折り曲げられた部分の3点が鉋身と接していることから、機能的には、図12-b、図12-c、図12-dともに同様である。ただし、3点支持という点で、図12-cと図12-dの方が安定している。図12-dは、図12-eに示した現在の二枚鉋の裏金の機能と全く同じである。

以上のことから、裏金の形状の変遷は頭が丸いものから四角い形状になり、切削角を大きくとるために鉋身と裏金は密着していたものから刃先のみ密着させ裏金の耳で調整するようになった。

3-2. 煙草庖丁を再利用した裏金

ここでは鉋の変遷を検討する際に手がかりと成り得る図12-dの裏金に着目する。裏金の右上端に約9ミリの穴が一つある。この穴があるものを「煙草庖丁の裏金」といわれていることから、その経緯を考察する。

富岡寅之助商店の商報(昭和9年発行)では、「押へ金」として「穴明キ」、黒田清右衛門商店『黒田商報』(昭和10年発行)には、「押鉋(合鉋)」として「庖丁押」、竹内亨一朗商店『越後代表的大工商報』(昭和14年発行)には、「裏金之部」として「最上鋼付本煙草庖丁」、三條金物株式会社『CATALOGUE』(昭和14年発行)には、図13のように「裏鉋」として「煙草庖丁」が掲載されている。

たばこの耕作は、慶長から明治に至る約270年間(1596-1867)は、自家用として耕作され、その後繰り返し布告された禁煙令により制約を受けつつ、全国に拡大されていった。特に、江戸時代中期以降になると、たばこ、わた、茶など販売用耕作が多く登場し、各地にそれぞれの名産地ができ、畑作技術の発展に貢献した²³⁾。

刻たばこは、図14に示す「たばこ庖丁」を用いて図15のように手切りにて家族仕事として、伝来当初からたばこの製造が行われてきた。たばこの生産地の一つである阿波池田において、明治20年後半、刻たばこが産業として成立するためには手工業から家内工業(工場制)に移行する必要があった。寛政12(1800)年に鉋による葉たばこ刻み機械である「かなな刻み機・剪台(図17、18)」のほか、江戸で文化年間(1804-17)に開発された「ぜんまい刻み機(図19)」が導入された。前者が「削る」に対し、後者は「刻む」という仕組みであった。たばこ刻み機の動力化は、量と質の両面の向上をもたらした²⁴⁾。



図12-a 二枚鉋 (裏金・頭が丸い)
 図12-b 二枚鉋 (裏金・リベット接合) 竹中大工道具館蔵
 図12-c 二枚鉋 (裏金・エクボ) 竹中大工道具館蔵
 図12-d 二枚鉋(裏金の面には「二九年九月 登〇商〇」の文字があるため明治29年9月に製造された登録商標の煙草庖丁と推測できる)
 図12-e 二枚鉋(現在)

図12 実物における二枚鉋の変遷

裏 鉋

10ヶ=付

寸 法	並	印 本 焼	市 煙 草 庖 丁	鋼 付 天 祐	勝 弘 印
寸 四 用	.50	1.00	1.50	2.00	3.00
寸 六 用	.55	1.00	1.50	2.00	3.00
寸 八 用	.60	1.00	1.50	2.00	3.00
二 寸 用	.80	1.50	2.00	2.50	3.50

図13 三條金物株式会社『CATALOGUE』昭和14(1939)年



図14 煙草庖丁 三好市井川民俗資料館所蔵

図15 煙草明細取調書、明治5(1872)年、東京国立博物館

図16 煙草庖丁 出典：秋岡芳夫・吉見誠『木工具・使用法』

近現代における鉋の変遷について

たばこは、明治37(1904)年3月31日公布、7月1日施工の煙草専売法によって、たばこの耕作・製造・販売に至るまで、国の管轄下に置かれた。それにともない、敷地・建物・機械器具などは、たばこ製造専用のもので徴収され、たばこ製造以外に転用できるものは、政府によって買い上げられた²⁵⁾。刻たばこについては、従来の民間業者の施設は規模が小さく、政府の製造工場として転用施設がなかったため、引き続きの家内工業的な小規模工場で製造委託(場外)とされた。製造専売制当初の刻み機は民間から徴収したものを使用していたが、その機種は雑多で、不完全なものや老朽化したものが多かった。その中でも「酒井式刻機(図20)」は比較的優れていたことから、明治43(1910)年、酒井式に改良を加えたものが、全般にわたって備え付けられた²⁶⁾。使用されなくなったたばこ製造機械類は密造防止のため、まず刃がはずされ徹底的に処分された^{注4)}。

図21は、図18で示したかな刻み機の刃(庖丁)であり、図22は図19で示したぜんまい刻み機の刃(庖丁)である。その刃には機械に固定するために約9ミリの穴が二つある。これは、秋岡芳夫『日本の手道具』において、「十九耗ほどの丸い穴」^{注5)}、富岡寅之助商店の商報では、「押へ金」として「穴明キ」が示している穴と考えられる。図21と図22に点線で示した裏金の実物である図23、24の穴の位置、大きさとも一致する。図21には「NO 62 登録商標朝日 53 2 18」、図22には「NO

64 登録商標朝日 53 6 14」と刻まれている。図23には「朝日」の「朝」が半分切れている切銘、図24には「53」の刻印がある。その他にも穴あきの裏刃には「登録商標」や「朝日」などいずれも切断された文字がある場合が多い。

以上のことから、刻み機の刃を切り分けて裏金として再利

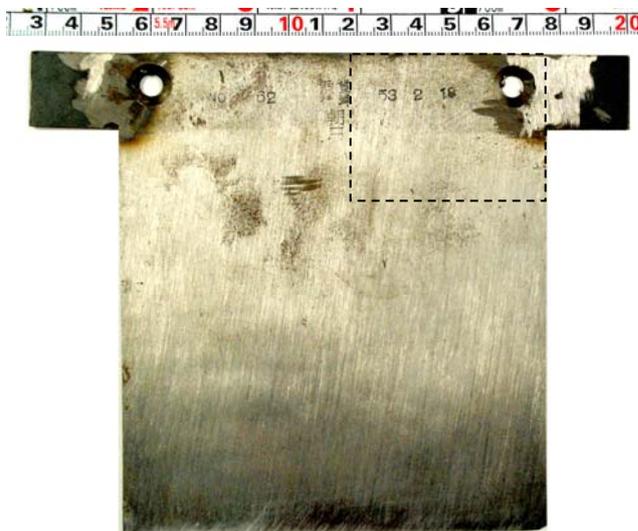


図21 かな刻み機の刃・復元・面、たばこ塩の博物館所蔵
刻印「NO 62 登録商標朝日 53 2 18」

〔---〕は、図23、24の裏金として使用された部分を示す。

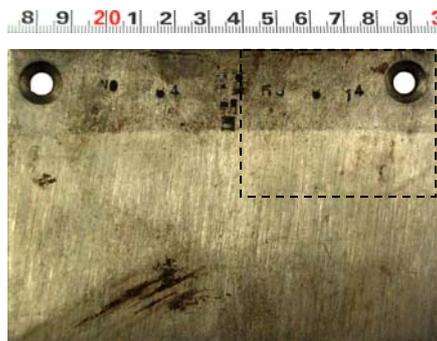


図22 ぜんまい刻み機の刃・復元・面、たばこ塩の博物館所蔵
刻印「NO 64 登録商標朝日 53 6 14」

〔---〕は、図23、24の裏金として使用された部分を示す。



図17 烟草鋸切圖『烟草百首』(文政3年) 出典: 神田孝一『日本烟草考』



図18 かな刻み機・復元
たばこ塩の博物館所蔵



図19 ぜんまい刻み機
阿波池田たばこ資料館所蔵



図20 酒井式裁刻機
阿波池田たばこ資料館所蔵



裏 面
図23 裏金(切銘「朝日」と読める)



裏 面
図24 裏金(刻印「53」)

用されていたことが明らかである。右上か左上の隅に穴がある場合のみ刻み機の刃を再利用した裏金と明確に区別できるが、切断する位置によっては穴がない場合もあること、そして、実際の数にはわからないが、当時、多くの刻み機が使用され民から官への移行に伴い、「酒井式刻機」への統一化が実施されたことを勘案すると、廃棄された刻み機は相当数あったと推測できる。そのため、刻み機の刃は、鉋の裏金として大工道具を扱う商店を通じて一般に多く出回っていたと考えられる。

秋岡芳夫『日本の手道具』で「煙草のみのいる家庭にもあったキザミ煙草用の煙草包丁」とあるし、明治35年発行の湯浅商店『直段報告』には「正鋼打煙草包刀」の値段が掲載されていることから、一般家庭で煙草包丁は購入可能であった。たばこの専売制にともない、これらの煙草包丁も使用されなくなったことから刻み機の刃と同様に煙草包丁も図16のように切断し、裏金として使用していたのだろう。その後、「煙草包丁」と称する裏金は、昭和10年代まで大工道具店で販売されていたことが、表1より明らかである。

4. 考察

以上のことから時代順に内容を整理する。江戸時代には二枚鉋は存在していなかった。明治時代に入り、西洋鉋が輸入されるようになり、それをもとにした二枚鉋の仕組みが明治18年に示され²⁷⁾、手工用の鉋としての二枚鉋は明治22年には存在した。

一方、鉋を使用する職人は、明治時代の古写真で見ると二枚鉋は使用していない。大工道具商報では、明治35年には合鉋用の裏金が販売されていることから、二枚鉋は存在した。その後、昭和9年の大工道具商報において二枚鉋は「手工鉋」とあることから、昭和初期まで二枚鉋は素人用や手工用であった。

裏金に焦点をあてると、明治35年発行の湯浅商店打物部『商海月報』には、「正鋼打煙草包刀」が販売されているが、煙草包丁を再利用した裏金は掲載されていない。明治37(1904)年に煙草専売法の施行によって日常生活で身近な存在でもあった煙草包丁が不要になり、裏金に転用されたと考えても不自然ではない。押切等で切断された結果、わざわざ鉋身のように頭を丸くするような手間をかけずに使用したと考える。大正期に裏金の形状が変化しており、切削角を調整するには、四角い形状の方が耳の折り曲げ角度を調整することで微調整が可能であることから、現在も同じ形状である。

昭和9年の大工道具商報には裏金として煙草包丁が販売されていることから煙草包丁を再利用した裏金は、二枚鉋の普及時期と重なっている。推測の域を出ないが、二枚鉋の普及には、逆目を防ぐ方法を知っていた職人が、身近にあった煙

草包丁を裏金として使用するという試みがあったのではないだろうか。それは、職人が自ら使用する道具は自ら作るという姿勢の延長線上にあると考える。

5. まとめ

本稿では、文献資料と古写真、及び実物資料をもとに一枚鉋から二枚鉋への変遷について以下のことを明らかにした。

(1) 二枚鉋の裏金で定位置に穴があるものは、刻み機の刃を再利用したものである。

(2) 西洋鉋が輸入された明治初期には、西洋鉋をもとにした二枚刃の仕組みが解明されていた。

(3) 二枚鉋は、手工用鉋として明治中期には存在した。

(4) 明治期には、鉋を使用する職人が、二枚鉋を使っている様子は見られないが、昭和前期には使用していることから、二枚鉋は手工用が大工用より先行して普及したものと考えられる。

今後の課題として、平鉋における切削の変遷という視点で手工用教科書にある両刃鉋や返刃鉋を含めて考察するしたい。

以上、鉋の変遷を考察したが、現時点で手に入った資料をもとに考察したものであることから、今後、より多くの資料をもとに考察することが必要であると考えられる。

謝辞

本稿制作にあたり、星野欣也氏(東京農業大学)、山田潤氏(指物師)、松尾知浩氏(ワークス・マツオ)、中島徹也氏(宮大工)、半田昌之氏(たばこと塩の博物館学芸部長兼首席学芸員)、大岩義雄氏(徳島県立文書館資料調査委員兼三好市文化財審議会委員)、戸家誠氏(三好市文化財保護審議会委員兼三好郷土史研究会会員)、宮本誠一氏(三好市教育委員会文化財課課長)、斎藤稔氏(三好市産業観光部農林振興課課長補佐)、林愛子氏(三好市教育委員会文化財課主事)、阿波池田たばこ資料館、三好市井川民俗資料館、長崎大学附属図書館、財団法人竹中大工道具館には、資料提供や助言を賜りました。記して謝意を表します。

注

注1) 台直鉋とは、一枚鉋の鉋身を鉋台にほぼ直角に仕込んだもので、鉋台は普通の平鉋より短い。主に、鉋台の下端を平らにために使用されるほか、硬木を削る際にも使用される鉋である。

注2) 綿帽子とは、不世出の名工と評された千代鶴是秀(1874-1956年)が名付けた、とがった頭の鉋のことである。

注3) 松尾知浩氏の筆者への手紙による、2010年8月4日。

注4) たばこと塩の博物館学芸部長兼首席学芸員である半田昌之氏の筆者への談話による、2009年12月26日。

近現代における鉋の変遷について

注5)「十九耗ほどの丸い穴」とあるが、19ミリではなく、直径10、9ミリほどの丸い穴を示していると思われる。

参考文献

- 1) 渡邊晶：日本建築技術史の研究，中央公論美術出版，2004. 2
- 2) 渡邊晶：大工道具の日本史，吉川弘文館，2004. 11
- 3) 村松貞次郎：大工道具の歴史，岩波新書，1973. 8
- 4) 中村雄三：道具と日本人，PHP 研究所，1983. 1
- 5) 星野欣也・土屋安見・石村具美：鉋台製造に関する歴史と現状，竹中大工道具館研究紀要 第5号，pp. 62-74，1993. 7
- 6) 沖本弘：平鉋の削り仕上げ(その3)－2枚刃の効果－，竹中大工道具館研究紀要 第6号，pp. 93-109，1994. 5
- 7) 船曳悦子：『香取屋工具店カタログ』にみる大工道具の変遷，竹中大工道具館研究紀要 第18号，pp. 2～20，2007. 3
- 8) 船曳悦子：両刃鋸の出現時期について，日本建築学会技術報告集 第15巻 第31号，pp. 935-938，2009. 10
- 9) 船曳悦子：近現代における両刃鋸の変遷について，竹中大工道具館研究紀要 第21号，pp. 49～59，2010. 3
- 10) 村松貞次郎：大工道具の歴史，岩波新書，p. 58，1973. 8
- 11) 秋岡芳夫・吉見誠：第36章 平鉋，木工具・使用法，創元社，pp. 76-77，1980. 4
- 12) 土田一郎：鉋②，日本の伝統工具，鹿島出版会，p. 107，1989. 6
- 13) 秋岡芳夫：大鋸と鉋・木工具コレクション考，日本の手道具，創元社，p. 221，1977. 9
- 14) 西和夫：オランダに渡った大工道具，国立歴史民俗博物館，pp. 71-74，2000. 8
- 15) 寺島良安：和漢三才図会，1712
- 16) 金沢兼光：和漢船用集，1761
- 17) エドワード・S・モース：大工道具とその使い方，日本の住まい内と外，鹿島出版会，p. 59，1979. 7
- 18) 酒井道夫・沢良子：タウトがみたもうひとつのニッポン，タウトが撮ったニッポン，武蔵野美術大学出版局，p. 139，2007. 3
- 19) 一戸清方：第二十九節 二枚刃必要ノ點，中等教育手工工具論，p. 86，1894. 4
- 20) 一戸清方：第二十九節 二枚刃必要ノ點，中等教育手工工具論，p. 88，1894. 4
- 21) 伊藤為吉：第十九節 二枚鉋，木工術教科書 第一，pp. 93，1894. 8
- 22) 佐藤巳之吉：第二節 平鉋，木工具の使ひ方及木工機械製作，p. 58，1925. 10
- 23) 日本専売公社：たばこ専売史 第一巻，pp. 144-145，1964. 3
- 24) 阿波池田たばこ史編集委員会：阿波池田たばこ史，徳島県三好郡池田町教育委員会，p. 51，1992. 3

25) 三和良一・鈴木俊夫：日本たばこ産業一百年のあゆみー，日本たばこ産業，pp. 94-95，2009. 9

26) 日本専売公社：たばこ専売史 第一巻，p. 634，1964. 3

27) 水上彦太郎：日本木工具之説，工學會誌 第44巻，1885
(提出期日 平成22年11月29日)